

大学不適應学生の個性に応じた支援策の検討

An Examination of Support Measures Corresponding to the Personality of the Each Student with the Feeling of Maladjustment to College

田中 亜裕子*

Ayuko TANAKA

抄 録

本稿は、1年生の大学適応に寄与した本学の取組について報告し、今後の学生支援の方向性について検討することを目的とした。まず本学における初年次教育と個別支援の取組について概観し、1年生の中途退学率の減少のために寄与したと思われる取組についてまとめた。次に大学不適應に陥っている学生の特徴を分析し、学生の個性に応じた個別支援のあり方について検討した。そして大学不適應予備軍の早期発見のために、2年生の1年次データを分析することで、大学不適應に陥る可能性を予測するのに有効な指標について検討した。

I. はじめに

大学進学率が50%を超え、大学全入時代が到来した現在、多様な学生が入学を果たすようになった。いまや初年次教育が学士課程教育の中に普遍的に位置づけられている(川島, 2008: 田中, 2014)¹⁾、²⁾ ことから推察されるように、多くの大学が入学生の高校から大学への円滑な移行を図り学生の多様なニーズに応えようと、様々な学生支援を強化している。初年次教育は「高校(と他大学)からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主に大学新生を対象に総合的につくられた教育プログラム」(濱名他, 2006)³⁾と定義される。しかし、その取組は必ずしも成功しているとはいえない。その表れとして、「ひらく日本の大学」2013年度調査結果報告によると、卒業時までの退学率は平均8.1%にもものぼる。この事実は、現在の日本の大学において初年次教育は中途退学問題を解決する万能薬ではないということを示している。

初年次教育プログラムのほとんどすべてを有している本学においても中退問題は深刻な状況にあった。しかし新たな個別支援を導入することで、2013年度1年生の中途退学率は減少した。本稿では、本学における初年次教育と個別支援の取組について報告し、学生データの分析から今後の学生支援の方向性について検討することを目的とする。

* 関西国際大学グローバル教育推進機構 教育総合研究所学内研究員

II. 本学の初年次教育の歩みと個別支援の取組

関西国際大学の初年次教育は開学とともにその歩みを始めた。開学の1998年、学生への個別支援施設として学習支援センター(2015年度から学修支援センターに改名)を設立した。そして翌年、本学初の初年次教育プログラムである「講義の攻略法」「レポートの書き方」を開講した。しかしプログラムの受講生は意欲ある適応度の高い学生が大半であった。そこで2001年に全学基本教育科目として「学習技術」を開講した。プログラムを必修化することで、大学での学びに必要なとされる学習スキルを、全学生に習得させることがねらいであった。こうして本学の初年次教育は必修型のプログラムとして展開することになった。科目以外の取組として2004年にはウォーミングアップ学習(入学前教育)を開始し、2007年には学生メンター制度(上級生によるピアサポート)を導入している。

表1. 本学の初年次教育の歩み

1998年	関西国際大学(経営学部)開学	学習支援センター開設
1999年	本学初の初年次教育プログラムとして「講義の攻略法」「レポートの書き方」を開講	
2001年	全学基本教育科目として「学習技術」を開講 人間学部開設 ポートフォリオの導入	
2002年	「学習技術」の教科書『知へのステップ』(くろしお出版)を刊行	
2004年	「大学のユニバーサル化と学習支援の取組」特色GP採択 ウォーミングアップ学習(入学前教育)の開始	
2006年	「初年次教育の総合化と学士課程教育への展開」特色GP採択 「KUIS学修ベンチマーク」制定 eポートフォリオ・システムの開発に着手	
2007年	eポートフォリオ・システムの本格運用を開始 学生メンター制度の導入	
2008年	「初年次サービスマーケティングの取組」教育GP採択 eポートフォリオ・システムのバージョンアップ 全学基本教育科目として「初年次サービスマーケティング」を開講	
2013年	全学基本教育科目として「初年次セミナー」を開講	
2015年	「学期の主題」による科目統合化に着手(1年春:多様性理解、1年秋:論理的思考)	

開学とともに、個別支援体制もスタートした。保健室と学生相談室は、1年生の保健調査票とUPI(University Personality Inventory)から得られた情報をもとに、健康状態の確認が必要な学生を把握し、4月末までに面談を行っている。また、学修支援センターは授業開始後5回までの授業欠席回数を学生ごとに取りまとめ、欠席の多い学生についてはアドバイザーが個別面談を実施している。このように集団授業式の初年次教育プログラムではカバーできない部分について、個別支援型のサ

ポート体制がその受け皿となっている。しかし、休学、中途退学に至る学生は毎年一定数存在し、中途退学率の減少にはつながらなかった。

Ⅲ. 学生支援の新たな試み

このような流れの中で、学修支援センターと初年次教育部門が 2013 年度生を入学の初期からサポートする試みを開始した。まず、学修支援センターは、新入生が入学前後に受験した基礎学力診断テストの成績を返却するだけでなく、低得点であった学生対象に基礎学力強化プログラム（リメディアル教育）を始めた。アドバイザーが担当学生をプログラムに誘導した。このことで、健康面、生活面に加え、学習面についても個別の適応支援を実施する体制が整い、多角的な学生支援が可能となった。

そして、高等教育開発センター初年次教育部門の提案で、全 1 年生を対象にアドバイザーによる個別面談を始めた。最も身近な教員となるアドバイザーとの関係を出来るだけ早く構築するために、入学直後の 4 月中に面談を設定した。この面談は、新たな環境であれば誰もが感じるであろう「不安」を切り口に、学生があらかじめ記入した準備シートに沿って面談が進められるよう構成されている。学生 1 人あたりの面談所要時間は 10～15 分程度である。

また同年、各部署が学生情報を持ちより、中途退学の要因分析と対策の検討を開始した。そして FD (Faculty Development) 研修会^{注1}においても学生データの分析を通して 2013 年度生の特徴を共有した。そして、2013 年度生以降の中途退学率は低減した。

中途退学減少の背景には、二つの要因が強く関与していると思われる。第一に、アドバイザーが新入生を大学に結びつける重要な役割を担ったと考えられる。2013 年度生より、入学直後の 4 月中にアドバイザーが早期面談を実施したことで、教員との個と個のつながりが早期に生まれたのではないかと推測できる。また、学生の状況を早期に把握することで、その後のアドバイザーの関わりも、質的に向上したとも予測される。第二に、学生に関するデータを、FD 研修会で共有したことをきっかけに、不適応学生に対して教職員の関心が高まったことも、1 年次退学率が低減した要因と考えられる。

このように、新入生とアドバイザーの個のつながり、そして学内における問題意識の共有の二重構造が、2013 年度入学生の 1 年次の退学率の大幅な減少につながったと考えられる。

Ⅳ. 学生データからみる不適応学生の特徴

個別面談、基礎学力強化プログラムの実施と並行して、高等教育研究開発センター初年次教育部門では、大学への適応が困難となる可能性のある学生の特徴を明らかにし、支援につなげるために、主に 1 年生の学生データの分析を担うようになった。特に 2013 年度 1 年生の退学率の減少に伴い、今までであれば退学に追い込まれていた学生が大学で勉学を継続していることに注目し、学生の個性に応じた個別支援の方法を模索する必要が生じた。本節では 2014 年度の FD (Faculty Development) 研修会の報告をもとに、不適応学生の特徴を明らかにする。

1. 大学不適應学生の2年次の特徴

2013年度入学生について2年次の総合成績(累積GPA)^{注2}で成績不振群と成績平均群に分け、2年次6月に回答した「大学への適応過程に関する調査」(以下、適応調査)^{注3}の結果を比較した(表2)。成績不振群(GPA1.5未満)は成績平均群(GPA1.5以上3.08未満)に比べると、学習習慣が身につけておらず、大学での学びへの興味、関心が低く、睡眠の問題や物事への取りかかりの問題を抱えており、自己評価が低いことが示唆された。

表2. 成績不振群と成績平均群の比較(2013年度生2年次実施アンケート)

	GPA1.5以下		GPA中群		差	t 値
	平均	SD	平均	SD		
【学習面】						
1 学習面でうまくいっている	2.15	0.75	2.68	0.71	-0.52	-4.95 ***
2 課題の完成に十分な時間と労力をかける方だ	2.27	0.74	2.55	0.73	-0.28	-2.55 *
3 学期末などの試験準備には十分な時間と労力をかける方だ	2.08	0.59	2.48	0.71	-0.41	-4.51 ***
4 大学の図書館にない本は、自分で購入したり、取り寄せてもらう	2.19	0.94	2.14	0.98	0.05	0.34
5 読みや意味のわからない言葉があったら、辞典(ネット含む)で調べる	2.85	0.91	3.01	0.81	-0.16	-1.31
6 学科・専攻の学びは、自分の興味・関心に合っている	2.79	0.91	3.22	0.73	-0.43	-3.27 **
7 講義を受けたい学科・専攻の先生がいる	2.73	0.95	2.92	0.89	-0.19	-1.45
【生活面】						
8 生活全般でうまくいっている	2.65	0.71	2.99	0.65	-0.34	-3.25 **
9 朝起きるのがとてもつらい	3.42	0.67	2.93	0.97	0.49	4.61 ***
10 日中、眠くてしかたがないことが多い	3.19	0.72	2.77	0.90	0.42	3.23 **
11 物事の取りかかりが遅い	3.21	0.70	2.96	0.85	0.25	2.01 *
12 物事をてきぱきとこなせない	3.00	0.77	2.68	0.85	0.32	2.78 *
【自尊感情、対人面】						
14 自分は人の役に立つことができる	2.60	0.72	2.85	0.66	-0.26	-2.43 *
15 自分は必要とされている存在である	2.56	0.64	2.77	0.67	-0.22	-2.17 *
16 対人関係でうまくいっている	2.96	0.82	3.16	0.72	-0.20	-1.85

*** : p<.001, ** : p<.01, * : p<.05

2. 大学不適應学生の1年次の特徴

2013年度入学生について2年次の総合成績(累積GPA)で成績不振群と成績平均群に分け、1年次6月に回答した「適応調査」の結果を比較した(表3)。これらの結果から、2年次で成績不振に陥っている学生と成績が平均的な学生を比較すると、1年次の頃は学習面にのみ有意差があり、生活面や自己評価については有意差がないことが明らかとなった。

表3. 成績不振群と成績平均群の比較（2013年度生1年次実施アンケート）

	成績不振群		成績平均群		t 値	
	平均	SD	平均	SD	差	
【学習面】						
1 学習面でうまくいっている	2.26	0.81	2.65	0.74	-0.39	-0.87 ***
2 課題の完成に十分な時間と労力をかける方だ	2.27	0.76	2.72	0.79	-0.45	-2.17 ***
3 学期末などの試験準備には十分な時間と労力をかける方だ	2.44	0.79	2.67	0.73	-0.23	-2.55 ***
4 大学の図書館にない本は自分で購入したり取り寄せてもらう	2.03	0.91	2.58	1.08	-0.54	-2.60 ***
5 読み方のわからない漢字があったら漢和辞典で調べるようにしている	2.24	0.92	2.58	0.95	-0.35	-3.20 *
6 学科・専攻の学びは自分の興味・関心にあっている	2.80	0.83	3.08	0.78	-0.29	-2.04 **
7 講義を受けたい学科・専攻の先生がいる	2.32	0.82	2.58	0.90	-0.26	-3.12 *
【生活面】						
8 生活全般でうまくいっている	2.76	0.88	2.98	0.73	-0.22	-4.02
9 朝起きるのがとてもつらい	3.09	0.94	2.81	1.01	0.27	0.38
10 日中、眠くてしかたがないことが多い	2.73	0.89	2.68	0.93	0.05	1.08
11 物事の取り掛かりが遅い	2.95	0.99	2.85	0.88	0.09	0.90
12 物事をてきぱきとこなせない	2.73	0.87	2.62	0.83	0.11	0.07
【自尊感情、対人面】						
14 自分は人の役にたつことができる	2.53	0.70	2.70	0.75	-0.17	-1.33
15 自分は必要とされている存在である	2.46	0.70	2.59	0.73	-0.14	-0.32
16 対人関係でうまくいっている	3.07	0.86	3.16	0.74	-0.09	-1.81

*** : p<.001, ** : p<.01, * : p<.05

V. 大学不適應学生の早期発見と支援に向けて

以上の結果から、すでに不適應状態に陥った2年の段階では、学習面、生活面など多角的な支援が必要であるが、1年の早期に不適應に陥る可能性のある学生を予測することが出来れば、学習面を中心にサポートすることで、その後の大学への適應を維持できる可能性があると考えられる。

現在、学習面に困難を抱えている学生の予測が可能な指標としては、基礎学力診断テストの成績と、適應調査の学習に関する質問項目がある。これら2つの指標と累積GPAには相関関係があることが確認されている。しかしこれら2つの指標からは、学生たちがどのような学習上の困難を抱えているかまでは予測することができないし、精度も高いとはいえない。

今後の初年次教育部門の課題としては、大学不適應に陥る可能性の高い学生を初年次早期に予測するために指標の精度を高めることと、個性に応じた支援を提供できるよう、関連部署との連携を図っていくことあげられる。

【参考・引用文献】

- 1) 川島啓二「初年次教育の諸領域とその広がり」『初年次教育学会誌』第1巻(1),26-32, 2008
- 2) 田中亜裕子「初年次教育の広がりと大学の属性との関係」『教育総合研究叢書』(7), 13-27, 2014
- 3) 濱名篤、川嶋太津夫編著『初年次教育 歴史・理論・実践と世界の動向』丸善株式会社, 2006

【脚注】

注1 本学では全教員の出席を義務付けている。

注2 Grade Point Average の略。科目ごとの成績に単位数を加味した加重平均で全体の成績を表す。

注3 本学が毎年1～3年生対象に実施している質問紙調査。

Abstract

The purpose of this paper is to report this school's efforts in helping freshmen adjust to college as well as future trends in student support. First, we outlined the First-Year Experience and individual support efforts at this school, and then we summarize the initiatives that are believed responsible for contributing to reducing the freshmen dropout rate. Next, we analyzed the characteristics of students with the feeling of maladjustment to college, and we examined the state of individual support that corresponds to each student's personality. And then, in order to detect students who will feel maladjusted to college early, we examined effective indicators that predict the possibility that a student will have the feeling of maladjustment to college by analyzing the freshmen year data of sophomores.